子ども学探訪

倉橋惣三との対話①

「根本考察」とはどんなものですか

浜口順子
（大学教員）

倉橋先生、背はあまりお高くなかったようですね。でも背筋は真っすぐでいらした。大きな講堂の壇上で講習会をされているお姿は堂々としておいでです。昭和の初め、東京女子高等師範学校附属幼稚園の園長（主事）をしていらした頃の写真。遊戯室の前のテラスで、数人の園児とまごと遊びをしている先生の、丸い眼鏡の奥では優しい目が笑っています。

唐突ですが、私の父は、先生のご長男と同じ年（一九一三年）の生まれです。最近それを知り、倉橋先生は私の「祖父」の世代なのだと認識した途端、倉橋惣三という人をこれまでよりリアルに、具体的な人として感じるようになりました。もっとも私は父の遅い子でしたので、先生が亡くなられた一九五五年よりも後にこの世に生を享け、先生と同じ時間を生きたことはありません。でも倉橋先生には、ちょっと話しかければ答えてもらえそうな親近性を覚えるのです。倉橋先生の著書や論考を読みながら質問を勝手に投げかけますから、傍らにいて私の思索を助けていただきたいと思います。

浜口順子（はまぐち じゅんこ）
お茶の水女子大学教授。本誌編集主幹。

ちょうど百年前からのメッセージ

本誌では、今号から「保育の『根本考察』にチャレンジ！」という特集を組んでいます。根本考察――倉橋先生が一貫してその重要性を説かれた言葉です。一九〇一年に『婦人と子ども』という名で創刊された本誌の編輯主幹を、先生は一九一二年（二十九歳という若さだったのですね）から、結局晩年まで四十年以上務められ、おびただしい数の論考を各時代に発表されました。現代では、そのすべてを居ながらにしてインターネットで検索して読むことができます（そんな楽して学問はできないよ、などとおっしゃるかもしれませんが）。

『幼児の教育』誌上に掲載された先生の最後の論考は、一九五五年一月号（第五十四巻第一号）の「新しき年を迎えるにあたって」ですが、おそらく体調がかなりお悪く、新しい原稿を書くことが難しかったのではないでしょうか。新年号の大事な巻頭言に穴をあけることはできず、それならばと引いてきたのが、さかのぼること三十八年、一九一六年十二月号（第十六巻第十二号）の巻頭に書いた「斯くてまた暮れゆく」の文章でした。

この原稿を書いている今は二〇一六年の暮れです。奇しくもちょうど百年前、「根本考察が足りない。」という一文で始まるこの論考は、三十三歳の新進気鋭の保育学研究者が世の幼児教育界の状況を憂いて、若き情熱を傾けて書いた文章、それは老いてなお記憶に深い文章だったということでしょう。

根本考察が足りない。根本考察が足りないから、問題がいつでも枝葉の處で動いて居る。而し

て、可なり色々のことが考へられ、試みられ、部分的に究明せられるに拘はらず、竟極の決定は何時までも其のまゝに殘されて居る。――我國の幼稚園教育界は、こんな風にして一年々々過ぎて居るのではあるまいか。時の經過は何程かづゝの進歩を積み上げてゆくには相違ない。しかし其の進歩は、餘りに氣まぐれな、無秩序な、斷片的な集積に過ぎないものであつて、そこに何等の系統的組織的進歩といふものを見ない。思へば餘りに非學問的なことではある。

思ひつきは時には非常に賢明なる眞理の發見者である。しかし又、非常に危險なる誘惑者である。思ひつきは偶然の力で吾々を其の一點に惹きつける。それだけに、全局の關係を忘れさせ、前後の關係を失はせる。それはそれだ。しかし、それは全體の中のそれだ。（中略）――我國の幼稚園教育界に、またしても此の思ひつきの多いことである。

意味の分らない模倣や雷同や。同じく意味のない反對や批難や。こんなことの繰返へしの中に我國の幼稚園教育界は、餘りに無意味に疲れて居る。風に吹きまはされて、ぐら〳〵と東西南北を廻りつかれて居るのでなければ、たゞ無意味に風に逆つて疲れて居る結果は、つまり、どつちもくだらないことに倦き〳〵して仕舞はざるを得まい。意味のない處に厭倦がある。根のない處に枯死がある。（中略）

分つて居るといふ。其の多數は、『此頃疑ひが無くなつた』人である。或は、小さい枝葉の一局部に安住停立して、そこに、幼稚園教育問題の全部を懸け、又自分の全部を懸けて居る人であつたりする。之れも一つの悟りの開き方かは知らぬ。しかし幼稚園教育を根本的に考へて居る人ではない。（後略）

――大正五年十二月十日「斯くてまた暮れゆく」（『婦人と子ども』第十六巻第十二号 p.453）から

「根本」の意味するところは？

枝葉末節な事柄はくだらないから考えても無駄だ、とおっしゃっているわけではないようですね。枝葉も光合成には欠かせない重要な部分です。しかし、根っことの関係がなければ、命を失います。私たちは、外から見えやすい枝葉だけを見て植物のことをわかったふうでいる、ということではありませんか。「根」は外から見えにくいけれど、それなしには水分も大地の滋養も吸収できず、自らを支えることもできない重要な部分。根があるから、その「木」の全体性が保たれている。もっと大きく捉えれば、その「木」が自然界との関係性につながれるネットワークの拠点が「根」だとも言えます。私たちが、見えるところ、つまり枝葉のことから現実の問題を考えることは当然だけれど、根本考察によって、どこにその「根」があるのか、それがどんな「根」なのかを探究することを忘れなければ、「氣まぐれな、無秩序な、斷片的な」思考とはならない、ということでしょう。つい、「思いつき」で浮かれてしまいがちな私などは猛省が必要です。それらしい理論や実践に飛びつき、その背景たる（根本たる）時代性や文化性を十分顧みようとしていないのではないか。ある言葉や研究がもてはやされると右へ倣え式に同じことをやりたくなり、はやりすたりに振り回されてはいないか……。

一九五五年に再録した際、新しく加えられた末尾の文章はこうでした。

「私の幼児教育に関する考えは三十年前も現在も根本的には変っていない。基本的真理は時代の変化にかかわらず真理である。」